

新刊紹介

マイク・サヴィジ著, 船山 むつみ翻訳

『7つの階級—英国階級調査報告』

四六判 / 416 頁 / 定価 2,800 円 + 税 / 東洋経済新報社, 2019 年

三宅 由佳

関西学院大学人間福祉学部非常勤講師

イギリスでは現在、階級問題への関心が急激に高まっている。英国放送協会（BBC）が実施し、2013年に公表された英国階級調査の分析結果は、大きな関心を喚起した。16万人が参加した調査結果を元に作成された階級算出装置に対し、公開一週間で700万人（英国成人の5分の1相当）がアクセスしたのである。

本書では、階級調査結果に基づき拡大する経済格差の実態を示すだけでなく、カール・マルクスが論じた「意識としての階級（人々が不平等による社会の分断をどのように受け止めているか）」を明確に示すことを目的としている。我々は今、民主主義社会に生きていて、それぞれに平等の権利があるはずだと信じたいが、経済的な機会が平等ではないこともよくわかっている。経済格差という現実と、平等な権利があるはずだという信念、このギャップが生み出す苦悩を解消するために人々が不満をぶつける対象が階級である。経済格差は階級によるのか、自己責任によるのか、特に人口の多くが位置する中間層は階級の境界線がどこにあるのかに関心を抱き、算出される自身の階級に動揺する様子が描かれている。

今日のイギリス社会では、長く続いてきた中流階級と労働者階級の職業による区別とは全く別の、新しい階級の秩序が根本から再形成されつつある。筆者らは、現代の階級構造を理解するためには、職業や経済資本だけでなく、フランスの社

会学者ブルデューが提唱した文化資本（趣味嗜好）および社会関係資本（社会的ネットワークの範囲と性質）に着目する必要を主張する。筆者らは階級調査に加え、回答者の偏りを補正するための全国サンプル調査を実施し、すべての資本を潤沢に所有する「エリート（すべての資本を多く持つ、人口の6%）」と、逆にすべてが乏しい「プレカリアート（すべての資本に恵まれない、人口の15%）」という両極の間に、各資本の多寡の組み合わせから成る、「確立した中流（エリートの次に3つの資本が多い、人口の25%）」「技術系中流（比較的裕福で、社会関係資本が少ない、人口6%）」「新富裕労働者（比較的裕福で、文化資本が少ない、人口の15%）」「伝統的労働者（3資本どれも少ないがバランスは良い、人口の14%）」「新興サービス労働者（若く、経済資本が少ないが残り2つの資本は豊か、人口の19%）」が存在することを見出した。そして、本書においてその特性を教育、地域格差等の観点から分析しているところが興味深い。

新たな社会階級における、エリート階級とプレカリアート階級とのヒエラルキーの差異はこれまで以上に鮮明であり、その中間にある各層の違いは極めて曖昧で複雑である。社会流動性が減少しているわけではなく、中間層では階層を移動できる可能性は大いにあるが、エリート階級がますます上昇していることは、人々の心理に大きな影響

を与えている。この構造の中で人々は、自分がもつ諸資本を総動員したり相互に転換したりしながら頂上を目指す競争に巻き込まれている。それは出発地点が頂上に近い者ほど有利で不公平であるが、いわゆる「能力主義」の建前により、不平等は温存されている。学生の選抜が広がり大学進学者は増えたものの、機会の均等が確保されたわけでも階級間の格差が解消されたわけでもなく、エリート階級の人々はさらに諸資本を蓄積することになり、エリート階級とそれ以外の階級との差異は更に拡大しているのである。

一方、エリート階級とは正反対に位置するのはプレカリアート階級であるが、その語源は「不安定な(プレケリアス)プロレタリアート」であり、世帯所得は際立って低く(1ポンド135円換算で108万円)、貯蓄はあってもごくわずか、借家住まいが多い、社会的ネットワークの数も最も少なく、自分よりステータスの高い職業の人とはほとんど交流がない、文化資本もごく限られている。しかし、だからといって、プレカリアート階級が道徳的に墮落しているという根拠はまったくない。英国階級調査への参加は極端に少なかったため、追加的なインタビュー調査が実施されたが、無知で思慮が足りない人々だと決めつけるのは大きな間違いであり、自身がいる世界がどんなところであるかもよく理解した上で、調査により最下層に位置づけられなくなかったためにとった守りの姿勢が確認されている。

かつては上流、中流、労働者階級の間に確立していた文化的、社会的な境界がそれぞれの階級にアイデンティティの間隔を与えていたが、今では

その境界が崩壊し、そのことがプレカリアート階級だけを蔑視する傾向を生じさせている。現代の階級のアイデンティティは他者と自分を区別するというものであり、自分がどこに属するかではなく、自身がどの階級に属していないかを重要視している。特にそれぞれの境界線が曖昧であることにより、不安を覚え、他者に対して批判的になっている。そのことが最下層のプレカリアート階級だけを蔑視する傾向を生じさせ、彼らを攻撃することが、それがなければ本質的に異なる集団に一体感を与えている可能性があるのだ。それがエリート階級による政治に利用され、貧困問題や格差拡大の解決には繋がっていないということが本書からわかる。

我が国においては階級を語る、小地域レベルにおける貧困状態を公表する、といった文化が見られないが、貧困問題に根本から向き合うにあたって、対象はどこに存在し、何を政策目的とするのかを把握できなければその政策は的外れなものになる。本書の文化資本については、日英の文化の違いや調査側の恣意性を排除する困難さ、また社会関係資本については、長期的に醸成し蓄積するものの評価として適切かどうか疑問はあるため、調査方法をそのまま我が国において適用することは困難である。しかし、人間集団や社会の在り方を主な研究対象とする社会科学において、個々の人間の意識に近づくには、膨大な定量データを収集したとしても、データの偏りを修正し、本質を見極めるために対象者の声を聞くことが肝要であることを本書より改めて認識させられた。